

## 大型ショッピングモールとシャッター街~栃木県佐野市と藤岡町にみる~

### (1)佐野新都市

この論文を書くにあたり、ここ数十年で発展を遂げた佐野新都市に焦点を当て、「商店街」と「大型ショッピングモール」の関係と今後の在り方について考察していく。

栃木県佐野市は、栃木県南西部に位置する人口およそ 12 万人の都市であり、ここ数十年で発展を遂げ、商業地区へと変貌した。佐野市は、東北自動車道と国道 50 号線の交わる所であり、そこが佐野藤岡インターチェンジ(IC)となっている。IC からさほど遠くない場所に「佐野・プレミアムアウトレット」や「イオン佐野新都市ショッピングセンター」が立ち並ぶ。また近くには大型家電量販店「コジマ電気」や、「洋服の青山」なども単独で店舗を構えており、客足の良さが伺える。上で述べたように佐野市は、交通アクセスが非常に良く、その特徴を生かし、1993 年に栃木・佐野両市からの申請を受け整備が開始され、2003 年にイオンとアウトレットがオープンした。これらは佐野市の顔となり、2013 年には年間 730 万人ほどがアウトレットに足を運んだ。駐車場で見る車のナンバープレートには、栃木以外にも、群馬、埼玉、東京、茨城県などの関東圏、これらほど多くはないが関東圏以外の地名を見ることも出来る。また、2007 年には佐野新都市バスターミナルが整備され、東京・佐野間を結ぶ高速バスの本数が増え、非常に利用しやすいものとなった。佐野の魅力はこれだけではない。佐野名物の佐野ラーメンや、2013 年にゆるきゃらグランプリの栄光を掴んだ「さのまる」など、アウトレット目当ての観光客に飽きさせないだけの魅力がある。ここまで書くと華やかに見えるが佐野市は都市開発事業の中で成功を収めている一例であり、数十年前までは何もない殺風景な土地だった。佐野イオンの前に構える佐野短大は 1990 年に設置された私立大学であるが、その当時は何もなく、私の母はイオンの前を通るたびに「前は何もないところにポツンと佐野短大があって、ほんと平地でなんもなかったから」と口にする。

佐野新都市に見るように、近年では大型ショッピングモールなどの大型商業施設に観光客が集中し、近隣住民もそこへ足を運ぶことが多くなった。このような時代の変化のなかで問題視されているのが「地元商店街」の「シャッター街」化である。佐野市から車で 10 分ほどの所に位置する私の地元である藤岡町も例外ではない。

### (2)藤岡町

藤岡町は、栃木県南部の町であり、その名前はあまり知られていないが、この町にある渡良瀬遊水地はラムサール条約に登録されていることもあり、知っている人も多い。渡良瀬遊水地付近は全国でも唯一 4 県(栃木県・群馬県・埼玉県・茨城県)を經由する県道があり、県道 9 号佐野古河線を進んでいくと次々に異なる県に入ることを知らせる標識が次々に現れる面白い光景を見ることができる。私の母はこの町で育ち、一時期離れていたが、この町に戻り、今現在は家族全員でこの町で暮らしている。母が私たちと共に栃木に戻って来た頃には、佐野市にはアウトレットやイオンが出来ていて、佐野市の印象は、私からしてみれば「賑やか」であるが、母からしてみれば「賑やかになった」である。大型ショッピングモールの登場で藤岡町の今は「シャッター街」化してしまった。私が小学生高学年の頃この町に戻ってきたが、当時はまだ今ほどシャッター街ではなかった。何のお店かは覚えていないが、少なくともほとんどのお店でシャッターは降りていなかったし、本屋にお金を握りしめて漫画を買いに行った記憶がある。しかし、今町を歩いてみるとほとんどのお店が平日だというのにシャ

ッターが閉まっており、営業していない。残っているのはスーパーマーケットくらいである。

佐野市にイオンやアウトレットが出来始めた頃と藤岡町の商店街にあるお店が続々とシャッターを降ろし始めた時期は重なっているため、偶然ではないだろう。実際、大型ショッピングモールの登場で、地元商店街の存続が危ぶまれている事例は、佐野市と藤岡町に限った話ではない。

### (3)大型ショッピングモールは悪なのか

大型ショッピングモールの登場で、賑やかだった商店街はすっかり昔の活気ある姿を失ってしまった。この構図に対し「ショッピングモールは商店街を壊した悪」であると口にする人も少なくない。しかし、本当に悪なのだろうか。少なくとも佐野市は佐野新都市として、商業都市へと生まれ変わったことで、大きな経済効果を生む栃木県有数の観光名所へと変貌を遂げ、またそれに伴う多くの雇用を生み出し、近隣住民への貢献も果たしている。また、近隣住民にとって、大型ショッピングモールのおかげで生活が豊かになったことは否めない。様々なものが便利になっていく時代の流れのなかで、商店街が廃れてしまったのは厳しい言い方になるが、仕方なかったのではないだろうか。しかし、大型ショッピングモールといえど、そのような時代の変化の中で表れた産物にすぎないため、衰退する時代が来ようとも不思議ではない。仮にそのような事態に陥った場合、商店街は既に廃れ、大型商業施設に頼りきっている周辺地域へのダメージはとても大きなものになることは容易く想像できる。いかに、商業エリアの経済効果を近隣地域への活性化につなげられるかが、「大型ショッピングモール」の存在する地域と、その周辺の「シャッター街」の存在する地域の双方に求められてくるのではないだろうか。

また、商店街の努力不足もその衰退の原因の一つではないだろうか。大型ショッピングモールと同じように商品を売るだけでは、人々が何でもそろう大型店舗を選択するのは当然である。しかし、大型店舗と違う、地域の人々の生活をよく知る商店街ならではの地域密着型のサービスを提供できるはずである。そのような努力もせず、大型ショッピングモールに異を唱えるのは、新しい価値観を受け入れられない保守的な考えであると捉えられてもおかしくないのではないだろうか。商店街が存続を望むのなら、大型店舗がライバル心を抱くような発展をしていくための工夫も必要である。